

自悠新聞

〒980-6101

仙台市青葉区中央1-3-1 アエル1階
発行所 丸善仙台出版サービスセンター

平成22年(2010年)7月 No.83
印刷 笹氣出版印刷(株)

☎022-264-0151 fax022-264-0112
k.ishimori@nifty.com 編集長 石森浩一

第17回東京国際ブックフェア基調講演

グーテンベルクの時代は終わったのか

ノンフィクション作家 佐野眞一

今月開催された第17回東京国際ブックフェアでの基調講演、ノンフィクション作家佐野眞一氏の講演要旨を報告いたします。

2001年、つまり今から9年前に私は『だれが「本」を殺すのか』を出版しました。奇しくもアメリカ同時多発テロがあった年でした。翌年、このブックフェアで講演をしましたが、その時、今の出版界とかけて「ダイエーに似ています」と説きます、と言いました。その心は「何でもあっても欲しいものはない」ということです。

鎖を解き放ったのがグーテンベルクだったので、日本の出版界は今惨憺たる状況です。『諸君』誌が次々と廃刊に追い込まれています。紙の出版という出版形態の耐用年数がそろそろ切れてきたのでしようか。しかし新しい歴史の波は、今新しいといわれる「電子出版」にもこうした状況が訪れるという「歴史の流れ」があることをまずは認識する必要があります。

現在の「本」は自分に荷が掛からないものばかりです。「本」は本来、読む人に様々な思いや感動を呼び起こし、心の中心に等高線を作っていくものです。つまり自分自身に様々な荷が加わるものなのです。しかし現在の本はどうでしょう。全く荷の掛からないものばかりです。こうしたノン負荷本が出来る背景には電子出版の出現があるのではないのでしょうか。

しかし私はこの電子出版の出現でむしろ「本」とはいったい何だったんだろう」と改めて考えるチャンスを与えられたと思います。「売れる本」なんて作るな、「欲しくなる本」を作れということですが。紙であれ電子であれヴィーイクル(伝達手段)に載るものつまり情報や知識、感動というコンテンツの質を高めていくことが今重要なのだということです。折角開いた電子出版の幕が、「何だ電子出版でこんなもの」ということで終わらないで欲しいのです。電子マネーが便利でも紙幣はなくならないのです。



佐野眞一氏

それから7年経った今、出版界はさらに深刻な状況になっていきます。本の売上げは2兆円を切ってしまいました。

こうした出版界に新たに「電子出版」が登場してきました。9年前電子書籍は地平線のかなたでありましたが、現在は「キンドル」や「アイパッド」のように我々の近い世界に入ってきました。この「電子出版」という言葉にみんなが浮き足立ってしまっています。版元、取次、書店、図書館などは読者がどうなっていくのだろうと一つ一つ精査する必要があるのに、ただただ右往左往しているように思えます。私としては、「チョットと待ってくれよ」と言いたいです。

先日、「本」について対談する機会がありました。その時私はこんなことを言いました。「本は犯罪と似ていますよね」と。一つ一つのディテールの積み重ねが犯罪という結果になっていくのです。つまり自分自身への負荷が積み重なって犯罪となるのです。しかし現在の犯罪はどうでしょう。秋葉原の無差別殺人のように突発的で自分自身に荷が掛かっていない犯罪が多い。これと同じよう

今年も東京ビッグサイトで行われた東京国際ブックフェアに行ってきた。出版界の危機的な状況とは裏腹に、年毎に出展会社は増えている。入場者数も多くなっている。今年もテマ国がサウジアラビアであったが、韓国やインド、イタリヤなど海外からのブースが大きく展開されていたのも今年の特徴であった。しかし、特に目に付いたのは、やはり電子出版にかかわるブースである。既存の紙媒体の出版社の大手は広く会場を使い新刊のアップルをしていっているもの、人垣が出来ているのはデジタルパブリッシングのブースである。DNP(大日本印刷)が今年秋に制作配信する電子版雑誌の技術と仕組みの解説には多くの人が聞き入っていた。グーグルのグーグルエディションも高い関心を集めていた。(次号で説明) 自費出版本もネットで配信したいという相談も始めている。グーテンベルク以来の出版革命の波を肌で感じた一日であった。

(裏へ続く)

M マルエム春秋

今年も東京ビッグサイトで行われた東京国際ブックフェアに行ってきた。出版界の危機的な状況とは裏腹に、年毎に出展会社は増えている。入場者数も多くなっている。今年もテマ国がサウジアラビアであったが、韓国やインド、イタリヤなど海外からのブースが大きく展開されていたのも今年の特徴であった。しかし、特に目に付いたのは、やはり電子出版にかかわるブースである。既存の紙媒体の出版社の大手は広く会場を使い新刊のアップルをしていっているもの、人垣が出来ているのはデジタルパブリッシングのブースである。DNP(大日本印刷)が今年秋に制作配信する電子版雑誌の技術と仕組みの解説には多くの人が聞き入っていた。グーグルのグーグルエディションも高い関心を集めていた。(次号で説明) 自費出版本もネットで配信したいという相談も始めている。グーテンベルク以来の出版革命の波を肌で感じた一日であった。